

クラス	TU313	担当教員	山本 秀人
テーマ	幼児期における「できる」と「わかる」—運動発達・認識発達・ことばの発達を題材に—		
著書・論文 研究課題等	<p>著書：『0～5 歳児のたのしい運動あそび』（分担執筆）いかだ社，2010 年。『幼児期 運動あそびの進め方』（分担執筆）創文企画，2009 年。</p> <p>論文：「運動会で大切にしたいこと」『ちいさいなかま』ちいさいなかま社,2017 年。「教材研究の重要性—『ドッジボール』と『ハンターボール』の実践分析から—」『日本福祉大学子ども発達学論集』第 7 号,2015 年。</p> <p>研究課題：乳幼児期の運動発達・認識発達・ことばの発達の関係について。乳幼児期に適した運動教材について。乳幼児期の運動指導法について。</p>		
<b>ゼミナール概要</b>			
キーワード：運動発達、認識発達、ことばの発達、教材研究、指導法			
<p><b>目的、内容、方法、授業計画等：</b></p> <p>乳幼児期の子どもたちは、歩いたり・走ったり・跳んだり・投げたり・蹴ったりという基礎的な運動、さらに「マット運動」や「ボール運動」などの教材が持っている運動技術の獲得など、意識的・能動的な活動によって多様な運動が「できる」ようになりますが、その背景には「わかる」という認識活動が介在しています。</p> <p>しかしながら、「運動ぎらい・体育ぎらい」の兆候が4歳・5歳児期の子どもたちにははじめることもあります。そこには、「できる—できない」「うまい—へた」「勝ち—負け」など、自分と友だち、さらには友だち同士の違いについて、技術認識を媒介としながら客観的にわかりはじめてくることが関係しています。</p> <p>これまでの幼稚園・保育所における運動や体育実践は、「がんばれ、がんばれ」ということばかけだけでおわっていませんか。「がんばれ、がんばれ」といわれても、できない子どもはどこをどのようにがんばればいいのか分からないのです。とはいえ、マット運動の「側転」が「できるようになるためのポイント」は8つあります。同じように、跳び箱運動の「腕立て開脚跳び越し」で跳び越せるようになるためのポイントは5つ、竹馬がのれるようになるためのポイントは4つというように、どの教材にも「できるようになるためのポイント」が存在しています。できない子どもは、「できるようになるためのポイント」のどれかがうまく機能していないのです。「できるようになるためのポイント」がわかっている保育者は、「できるようになるためのポイント」に応じた指導ができ、子どもたちを「できる」ようにすることが可能になります。しかしながら、「できる」だけが運動・体育のねらいではありません。「できる」ことと同時に、その教材で「わからせたい内容」があるはずで、保育者は、子どもたちに「わからせたい内容」を科学的・系統的に選択し教材化し、保育活動を展開していく必要があります。</p> <p>本ゼミナールでは、(1)乳幼児期の運動発達・認識発達・ことばの発達の関係、(2)幼稚園・保育所における体育の役割（子どもたちに体育で何を教え・伝えるのか）、(3)「できるようになるためのポイント」および「わからせたい内容」、(4)すべての子どもが「できて・わかり・おもしろい」指導法、について検討します。</p> <p>3年次には、以上の4点を文献学習・ゼミでの実践・見学・研究会（「全国保育問題研究集会」「全国保育団体合同研究集会」「学校体育研究同志会全国大会」）の参加を通して学習・研究し、サブゼミ単位によるゼミ論文をまとめます。4年次には、それぞれの関心に基づき研究テーマを設定し、卒業論文を完成させます。</p>			
<b>担当教員からのメッセージ</b>			
<p>(1) 実技がメインのゼミナールではありません。個人およびサブゼミによる事前の学習を前提としてゼミナールを展開していきますので、そのための努力を惜しまないことを望みます。学習もあそびも全力投球しましょう。</p> <p>(2) ゼミ合宿（3年次春、4年次夏）は、全員参加を原則とします。</p> <p>(3) 研究会（6月および8月）への参加を予定しています。どれか1つには必ず参加してもらいます。</p> <p>(4) 運動・体育が大好きな人はもちろんですが、いまだに運動ぎらい・体育ぎらいの人は特に大歓迎です。</p> <p>(5) 本ゼミナールを希望する学生は、11/23(木)のゼミオリエンテーションとは別に、必ず面談に来てください。</p>			